

宮田直彦のエリオット波動レポート

マーケット見通し(短期アップデート) 5月1日 11:03AM 更新

[日経平均]

【当面の想定レンジ】 47,000～61,600 円

[NY ダウ・S&P500]

【当面の想定レンジ】 (NY ダウ) 45,000～50,500 ドル
(S&P500) 6300～7500

[ナスダック 100]

【当面の想定レンジ】 (ナスダック 100) 23,500～28,000
(ナスダック総合) 21,000～25,100

[米ドル/円]

【当面の想定レンジ】 140.000～160.000 円

[ドルインデックス(ドル指数)]

【当面の想定レンジ】 95.000～102.000

エリオット波動とは

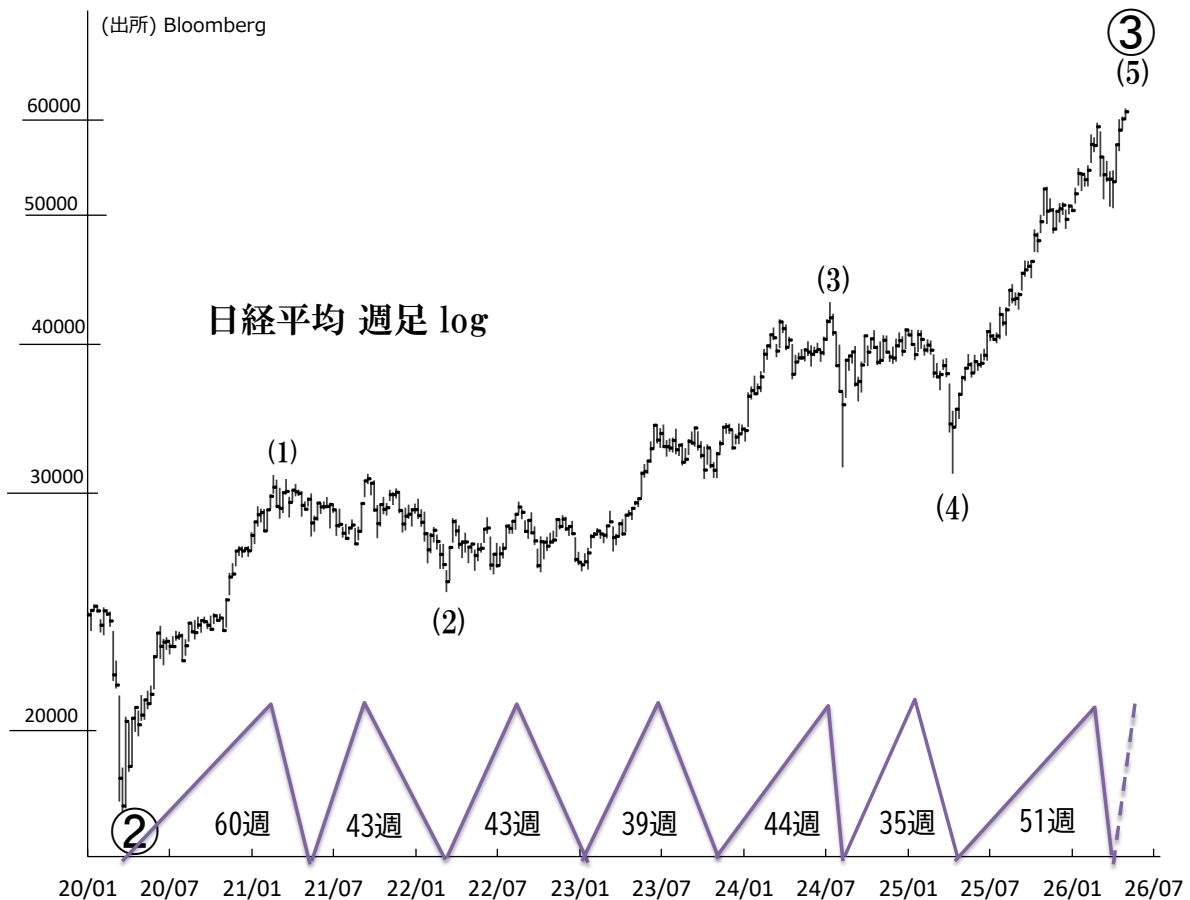
株式・為替動向を予想する心強いテクニカル手法

米国人ラルフ・ネルソン・エリオットが提唱した、今後の株式や為替など市場価格の動向を予想する手法です。相場は5つの上昇波と3つの下降波（合計8つの波）で一つの周期を作るパターンに従って展開するとされます。

このパターンは集団心理によるもので、数分から数十年といった様々な時間軸において観察されます。

フィボナッチ数列、黄金分割比率をチャート分析に初めて導入したのもエリオットです。

日経平均・TOPIX



【週足 エリオット波動分析】

日経平均はプライマリー第④波調整を終えつつあるか、既に始まったかのどちらです。

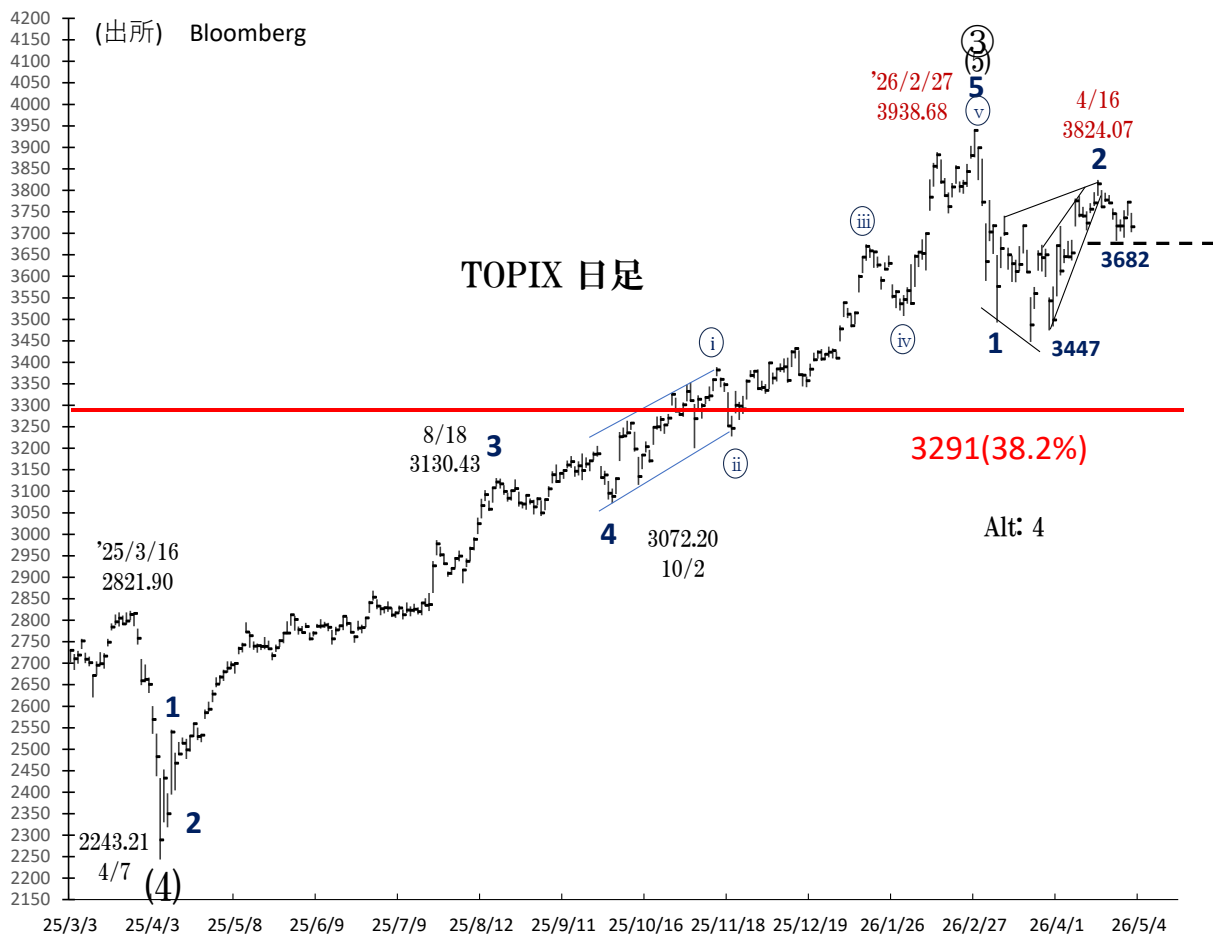
4月の日経平均は8,221円高(16%高)と、月間上げ幅が過去最大になりました。しかしこれは、限られた値がさ株(AI・半導体関連株など)の影響を大きく受けたことによるものです。4月の東証プライム銘柄騰落数は、値上がり累計[15645]に対し値下がり累計は[16492]と、値下がりの方が多くなりました。

限られた銘柄が指数を引っ張る構図は、強気相場の最終局面(第5波)の特長のひとつです。

3月末からの週次サイクル(※)は、弱気型「レフト・トランスレーション(右肩下がり)」になるとみられ、サイクルの前半で天井を付けることになるでしょう。

サイクル高値の時期として4月～5月が相応しいとみられ、4月ピークアウトの可能性に注目です。高値示現後は、年末～来年3月のサイクル終点に向け株価は下落基調を辿るでしょう。

(※)週次サイクル期間(2020年以降の補正後)は45週±8週(37週～53週)。サイクルの高値から安値まで、下げ率は10%～26%(平均17%)。



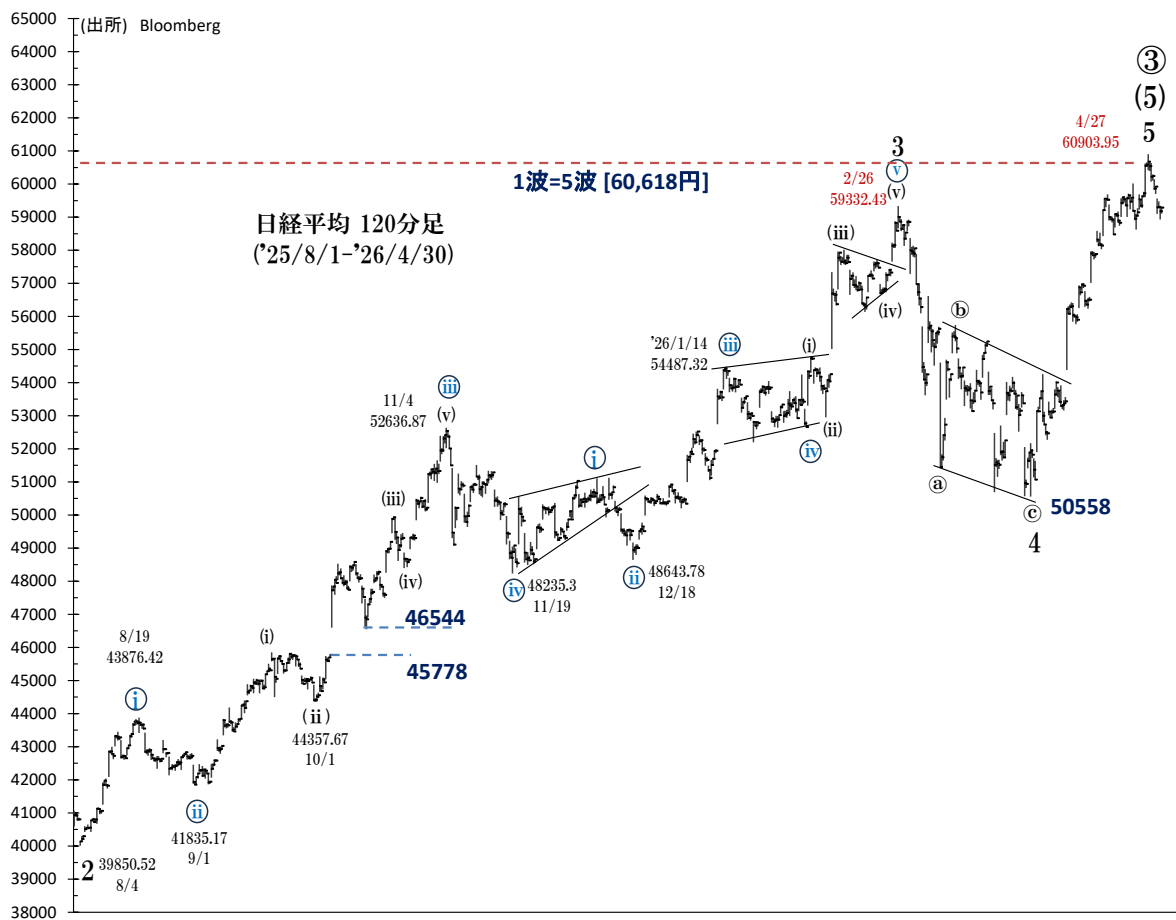
[TOPIX]

TOPIX の最高値は 2 月 27 日(イラン戦争開戦の前日)に付けた 3938(時価総額 1326 兆円)であり、日経平均に先んじています。時価総額加重型の TOPIX は景気の先行指標のひとつであり、イラン戦争からの企業業績悪化・景気後退リスクに敏感になっています。

プライマリー④波が既に始まったのなら、④波の調整規模はプライマリー①波(2018 年 1 月～20 年 3 月)の下げ率(37.2%)と同等か、それ以上の大きさになるでしょう。

3492(3/9 安値)からの第 2 波は、3824(4/16 高値)で終わった可能性があります。それは第 1 波の 78.6% 戻り水準[3842]に近い水準で付けた高値です。

4 月 23 日ザラバ安値(3682)を下回ると、第 3 波による下落が始まったこと最初のトリガーが引かれます。ひとたび第 3 波が始まれば、3447(3/23 安値)を早々に下回ることになるでしょう。



[日経平均]

50,558 円(3/31 安値)からのマイナー級第 5 波による上昇は、60,903 円(4/27 高値)を以て終了したかもしれません。

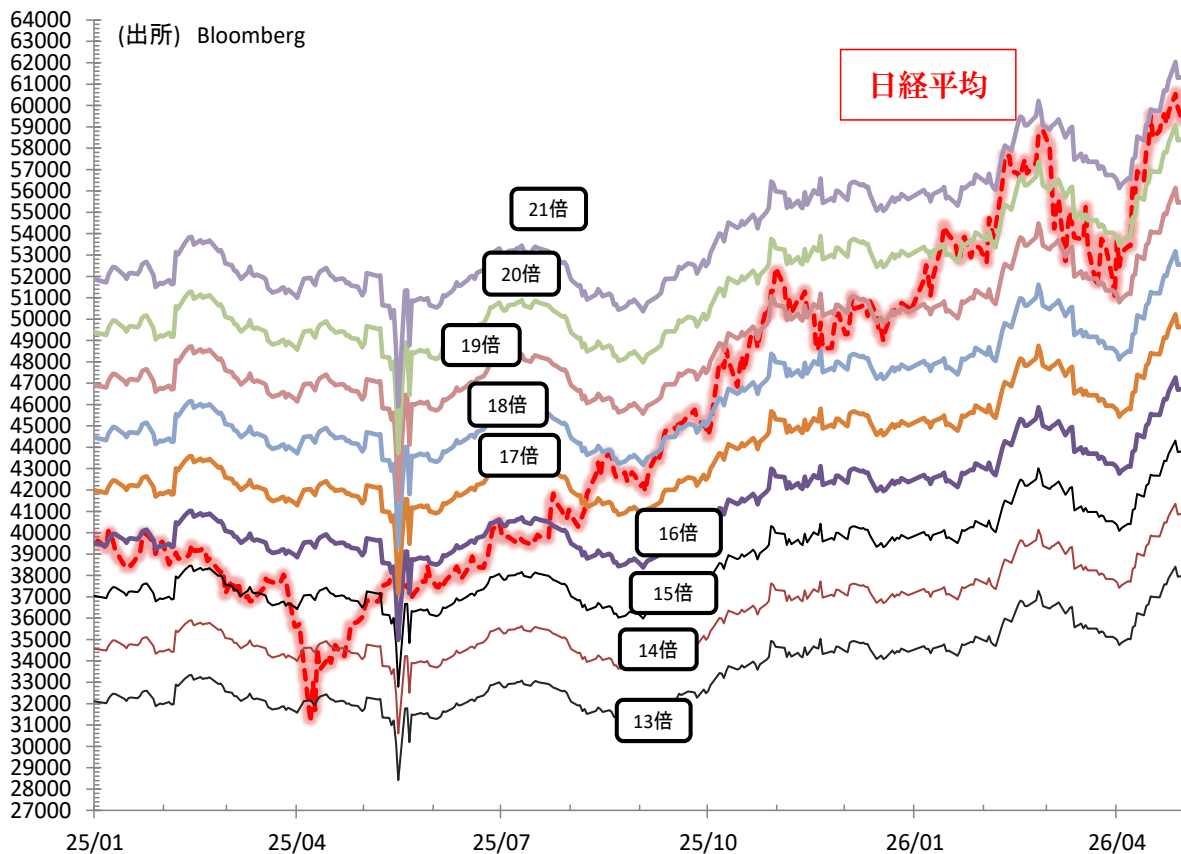
4 月 24 日時点の信用買い残はさらに膨らみました(5 兆 6232 億円)。4 月 30 日は日足がマドを空けて急落となりました。この 2 日間の急落により、レバレッジ買いポジションに損失が発生し始めた可能性が高いでしょう。

5 月 1 日は反発して始まるのが予想されますが、大型連休前ということもあり、買い一巡後には「やれやれの売り」が出て来やすいでしょう。

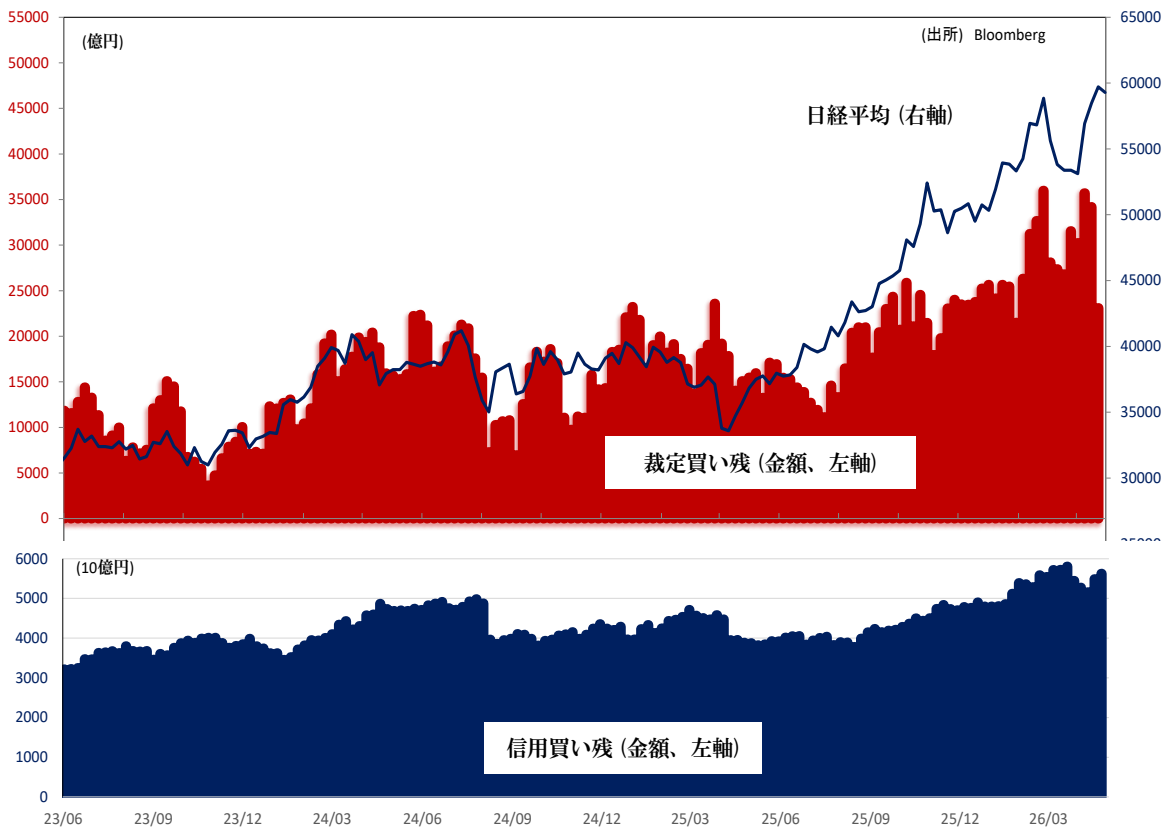
相場が上昇にあるときは信用買いは強気の燃焼です。しかし下げ相場に転換した途端、高水準の買い残は「売りが売りを呼ぶ」という逆サイクルを誘発しかねません。

[予想 PER 別の日経平均水準]

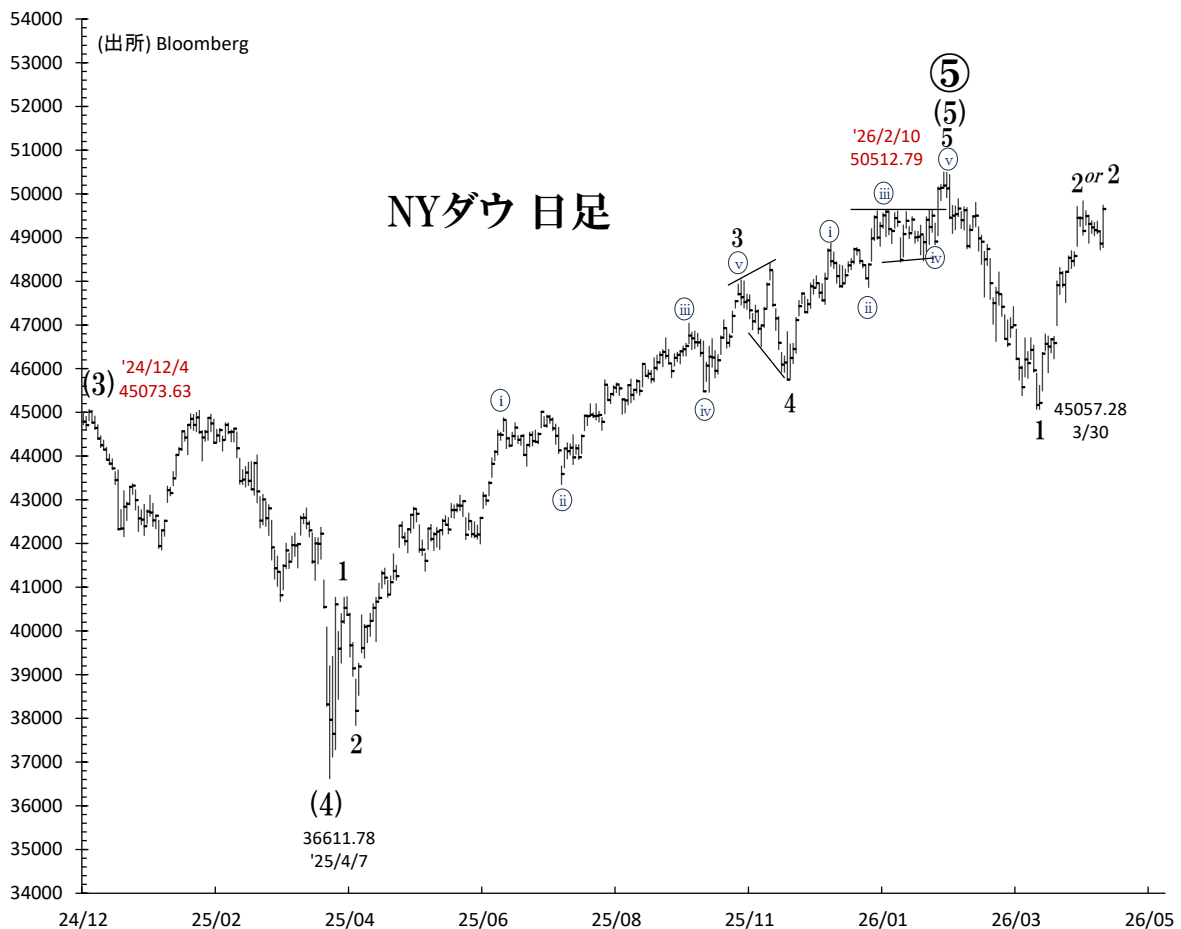
4 月 30 日の日経平均予想 PER は 20.30 倍、予想 EPS は 2920 円です。過去最高の予想 EPS は 2954 円(4/27)です。



裁定買い残と信用買い残] (4月24日時点)



NYダウ・S&P500



【NYダウ 30日足 エリオット波動分析】

45,057ドル(3/30 安値)からは第2波リバウンドと解釈されます。4月24日は一時49,848ドルまで上昇、2月から3月までの下げ幅に対し87.8%を戻しました。

2000年ITバブルからのアナロジー(類似)からは、NYダウが最高値50,512ドルを超えることはありません。ちなみに26年前、NYダウは第2波で第1波の下げの84%を戻しており、今回の戻り率に匹敵します。

第2波が終わるなら、まもなく第3波による急落が始まるでしょう。

S&P500とナスダック100が足元で最高値を更新する一方、NYダウが2月高値(50,512ドル)を更新しないなら、米株市場は26年前の「韻を踏む」ことになりそうです。そうなれば今年の「セル・イン・メイ」は、例年以上に重要な意味を持つでしょう。



【S&P500 日足 エリオット波動分析】

昨年 10 月 29 日高値からの調整は「エクспанディッド・フラット」(a)–(b)–(c)を形成し、それは 3 月 30 日安値(6319)まで 5 カ月続きました。©波の長さは@a波の 1.618 倍[計算値 6357]となり、パターン完成とみることができます。

足元で進行する上昇波は第 5 波とカウントできます。それを以て、昨年 4 月以来の第(5)波は完了する見込みです。

4 月の急騰の途中で三つのマドが空きました。これは「三空」とみられ、トレンド反転は近いでしょう。

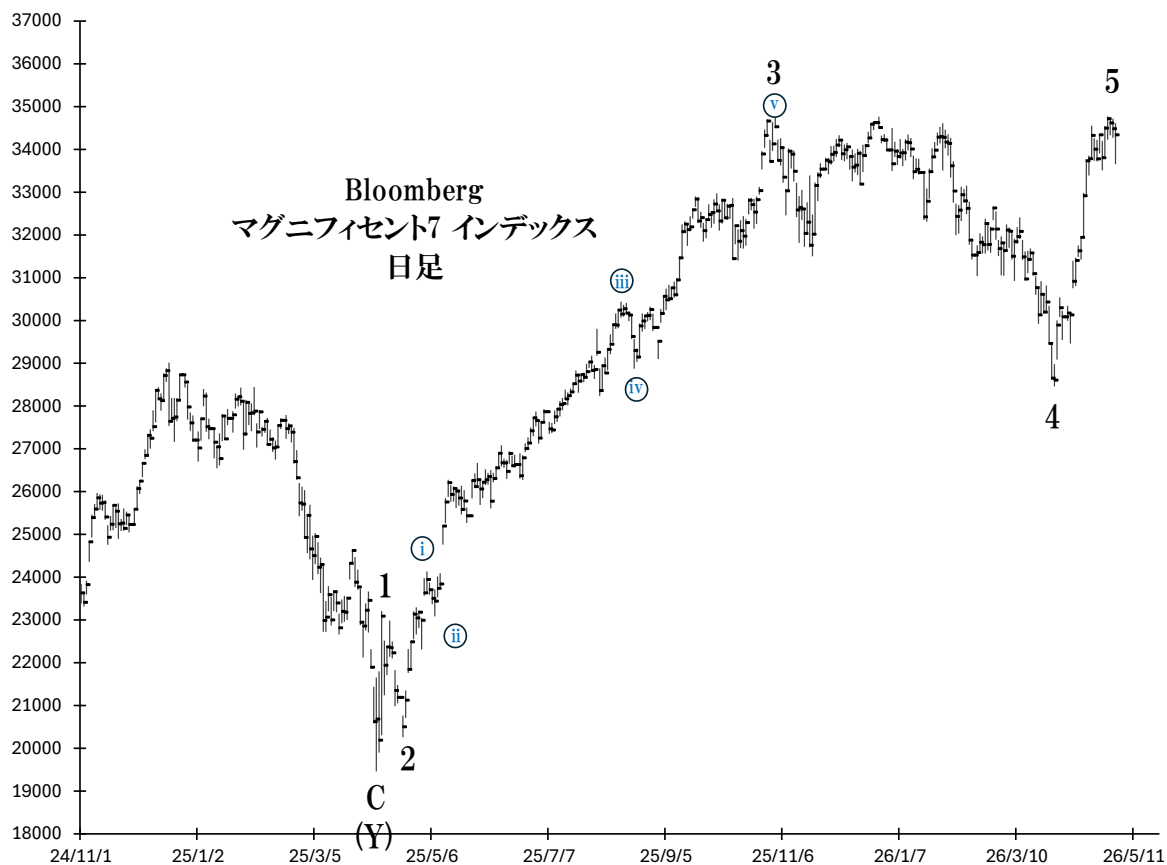
第 3 波トップは 10 月 29 日、(b)波トップは 1 月 28 日でした。このように 3 カ月間隔で高値を付けるリズムが続いているなら、第 5 波天井は 4 月末に付けることとなります。4 月 30 日には一時 7219 と最高値を更新しましたが、この辺りがピークになるかを注目してみましょう。

ダウ輸送株平均は、4 月 22 日高値から 29 日安値まで 17.7%安となりました。全米平均ガソリン価格の 1 ガロン当たり 4 ドル超えが定着し始めたことも一因でしょう。25 年 4 月から 1 年続いた 5 波構成ラリーは、すべて完成した可能性があります。

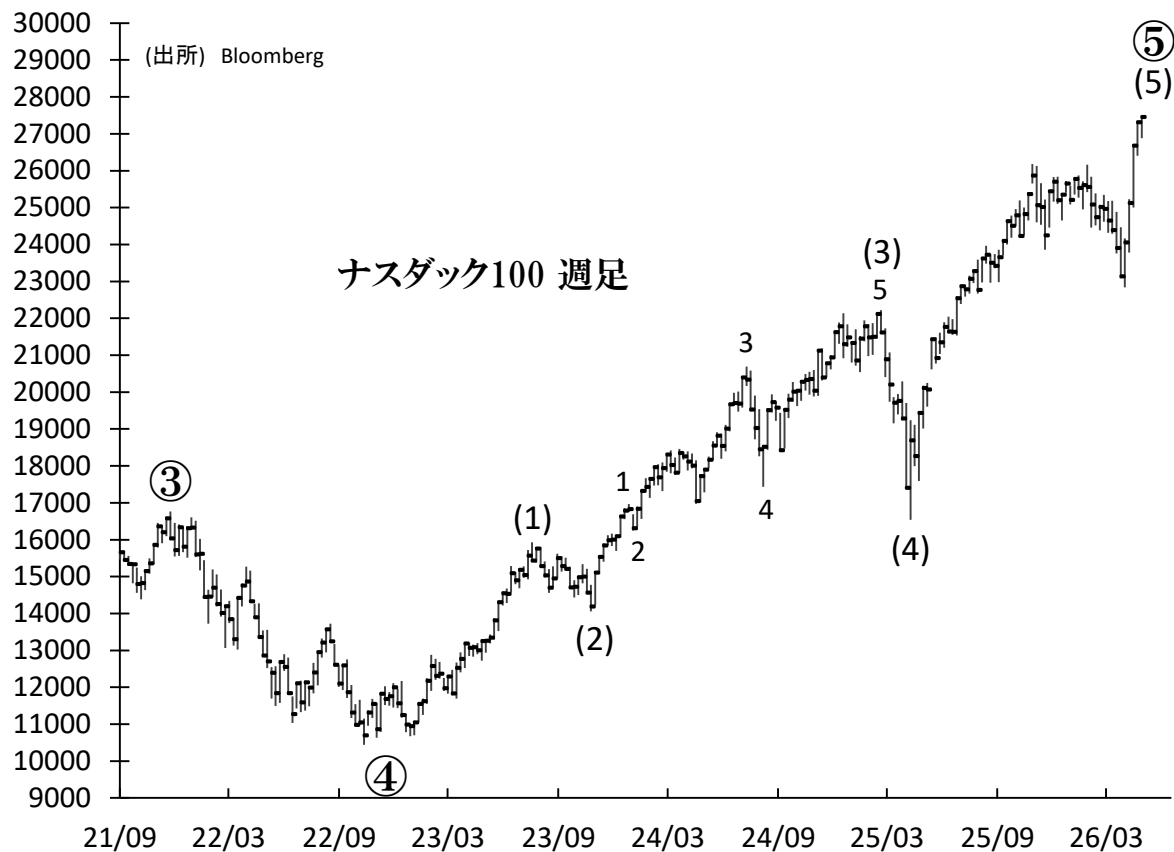
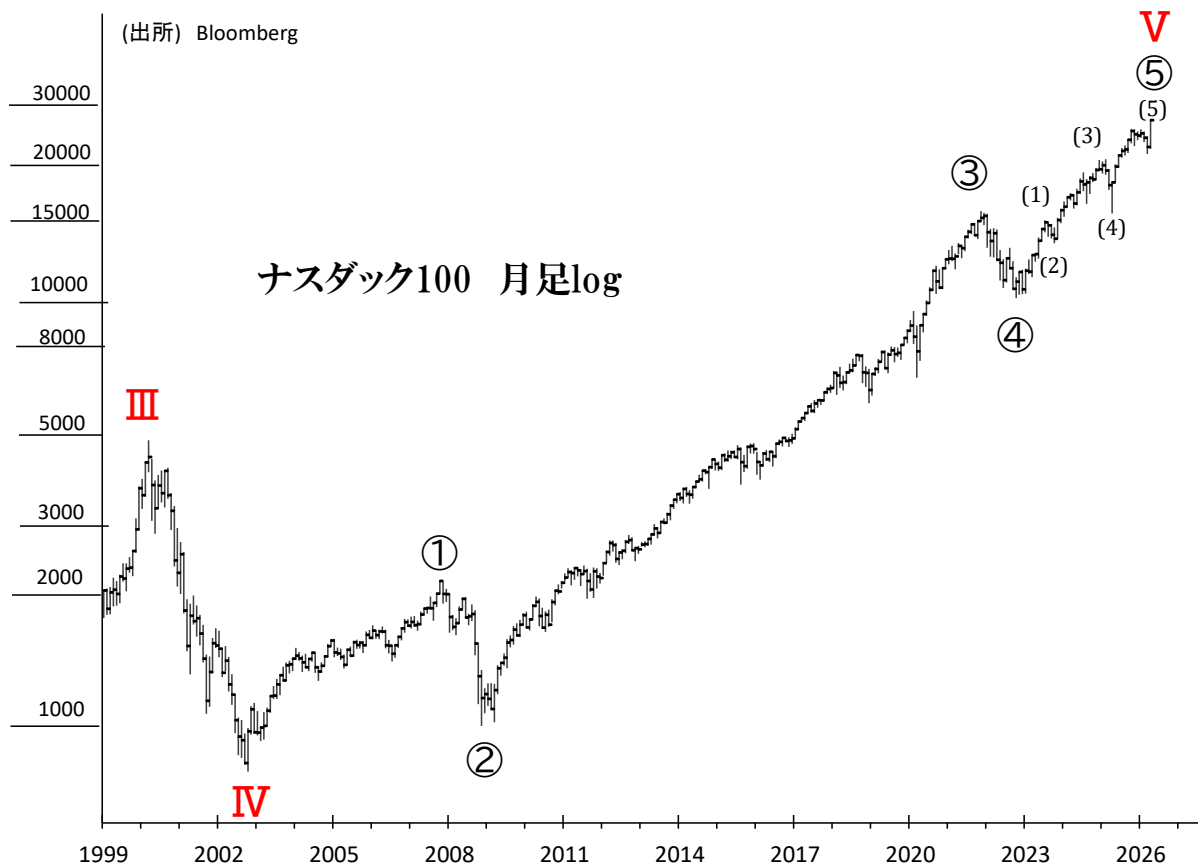
[ダウ輸送株平均] 高値から17.7%安

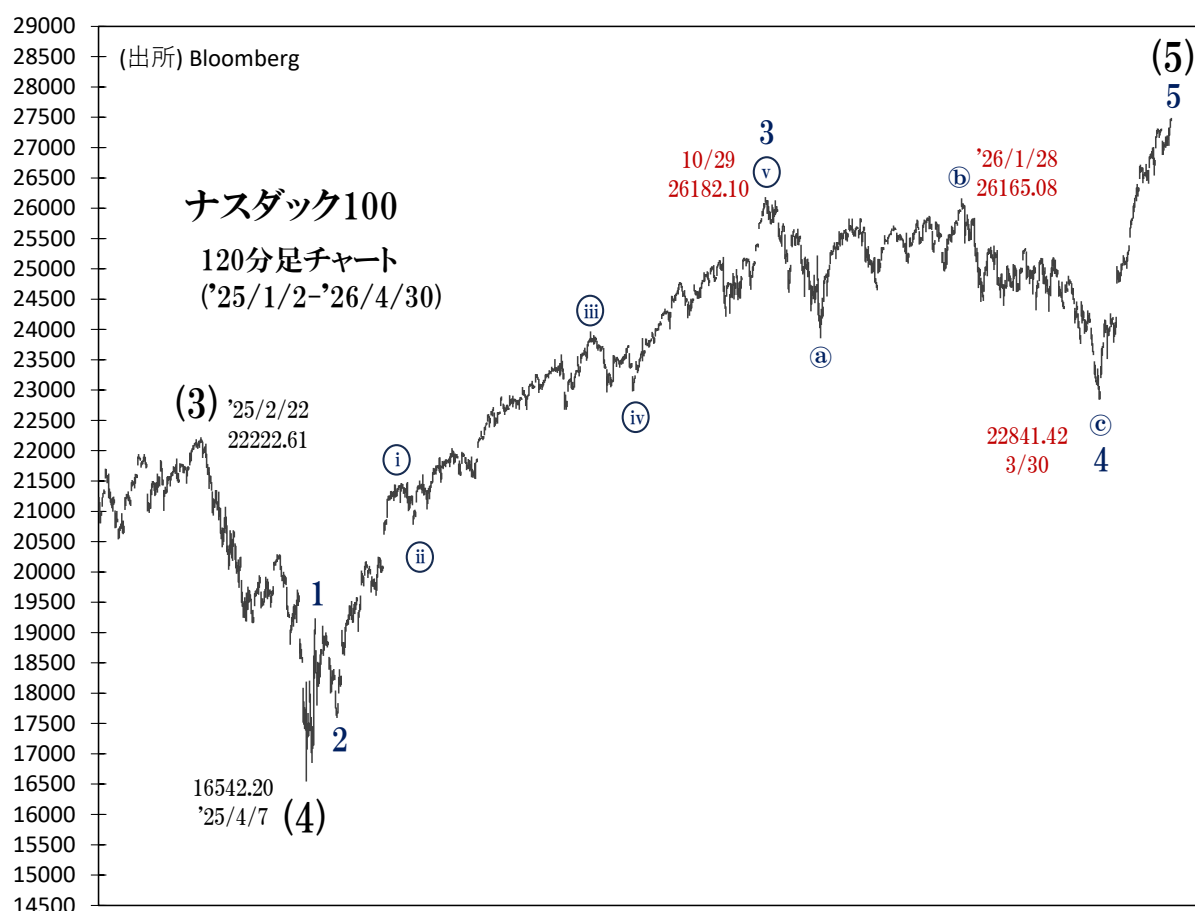


[マグニフィセント7] 3月からの上昇第5波は完了するか



ナスダック 100





【ナスダック 100 時間足 エリオット波動分析】

22,841(3/30 安値)からの上昇は第 5 波目とカウントされます。

ナスダック 100 は 3 月末から 4 月中旬(3/31-4/17)まで 13 日連騰となりました。ナスダック 100 の 13 日以上の連騰は 5 回目です。非常にレアな連騰記録ですが、過去を検証してみたところ、必ずしも強気相場に繋がったわけではありません。

過去 4 例中 3 例は、連騰が終わってから 1~2 カ月内にピークアウトしています。さらに、連騰が始まった日から半年以内に、連騰の起点終値を下回っています。

(過去例は少ないものの)過去のパターンからは、10 月頃までにナスダック 100 が 23,740(3/31 終値)を下回っておかしくないことになります。

なお SOX 指数の連騰記録も 18 日間(3/31~4/24)で終わりました。

指数を構成する 30 の半導体株の時価総額合計が、米国株全体に占める割合は、今では 13%に達しています。SOX 指数の動向は、今後の米国株の行方を大きく左右するでしょう。

米ドル/円



【月足・エリオット波動分析】

日米実質金利差から導かれる米ドル/円(以下、ドル/円)の水準は、現在 1ドル=138 円程度です。足元の日本円は金利差からみた妥当な水準よりも極端な過小評価が続いています。

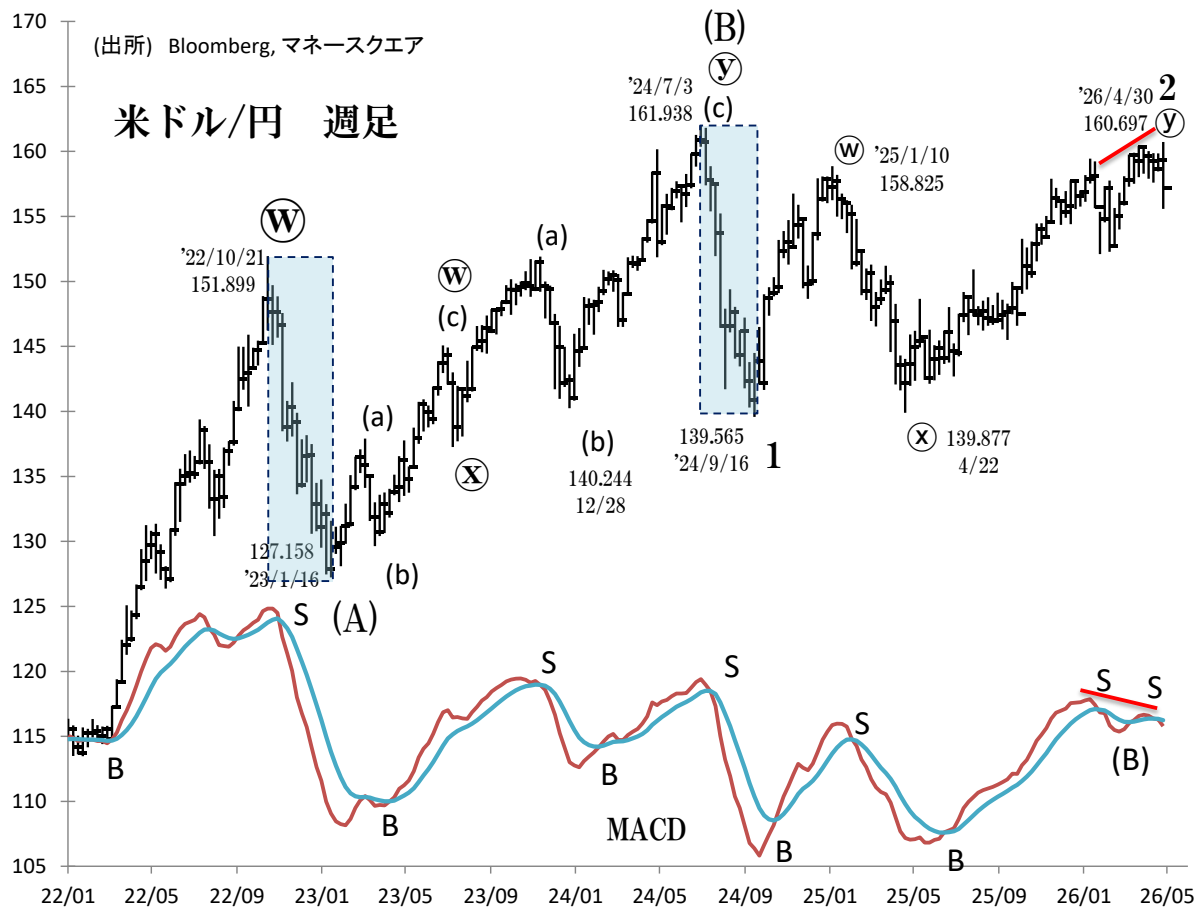
さらには、日本が「金利ある世界」に入った一方で、実質実効円レートは今なお史上最安値圏にあります。

このような「超円安」を筆者は「円安バブル」とみており、それは今後いつ弾けてもおかしくありません。

「失われた 20 年≒金利なき世界」では、円売りで調達した資金を様々なアセットに投資する円キャリー取引(※)が世界の潮流でした。しかし「金利ある世界」では、円キャリー取引の巻き戻し(円買い戻し)が進むと共に、市場ボラティリティが急上昇するリスクに留意すべきでしょう。

(※)BIS(国際決済銀行)によると世界の円キャリー取引規模は 40 兆円程度とされます。

ドル/円は 3 月から 4 月にかけて長期上昇チャネル上限を上抜きました。しかし 4 月の終値はチャネル内に引き戻されました。これにより「スローオーバー」完了が確認されました。天井パターンの確認は、ドル/円が 2024 年高値(161.938 円)と 4 月高値(160.697 円)を以てダブルトップを完成したこと、および中長期のドル安・円高トレンド入りを強く示唆しています。



【週足 エリオット波動分析】

3 月末～4 月を重要なターニングポイントとして注目していましたが、4 月 30 日の動き(1 年 9 カ月ぶり円安水準から一転、一時 5 円以上円高となりました)は、まさに基調転換を印象付けるものです。

MACD は足元、1 月末に続いて 2 度目の売りシグナルが点灯しています。それはダイバージェンスを伴う、通常よりも強い売りシグナルです。

週足チャートにシャドーで示した箇所は、円買い介入後にみられた 2 度の急激な円高です。最初は 22 年 10 月～23 年 1 月の 3 カ月間に、24.741 円幅の円高となりました。次は 24 年 7 月～9 月の 2 カ月半で、22.373 円幅も円高が進んでいます。

これらのアナロジー(類似)からは、ドル/円が今後 3 カ月程度で 20 円～25 円下落する可能性がある、ということです。もしそうであれば、7 月までに 1 ドル=140 円に達するというシナリオが得られます。



【日足 エリオット波動分析】

4月30日の円買い介入(?)によってドル/円は、この日の高値 160.697 円(1年9カ月ぶり円安)から大きく下がり、一時 155.487 円までドル安・円高となりました。この日ドル/円は、3月～4月のレンジ下限を明確に下回っています。

155.487 円を下回ると、それは過去1年間のサポートライン(重要線)の下方ブレイクを意味するものとなり、160.697 円がピークであったことの証左となります。この場合は短期的にも152 円処へのドル安・円高となるでしょう。

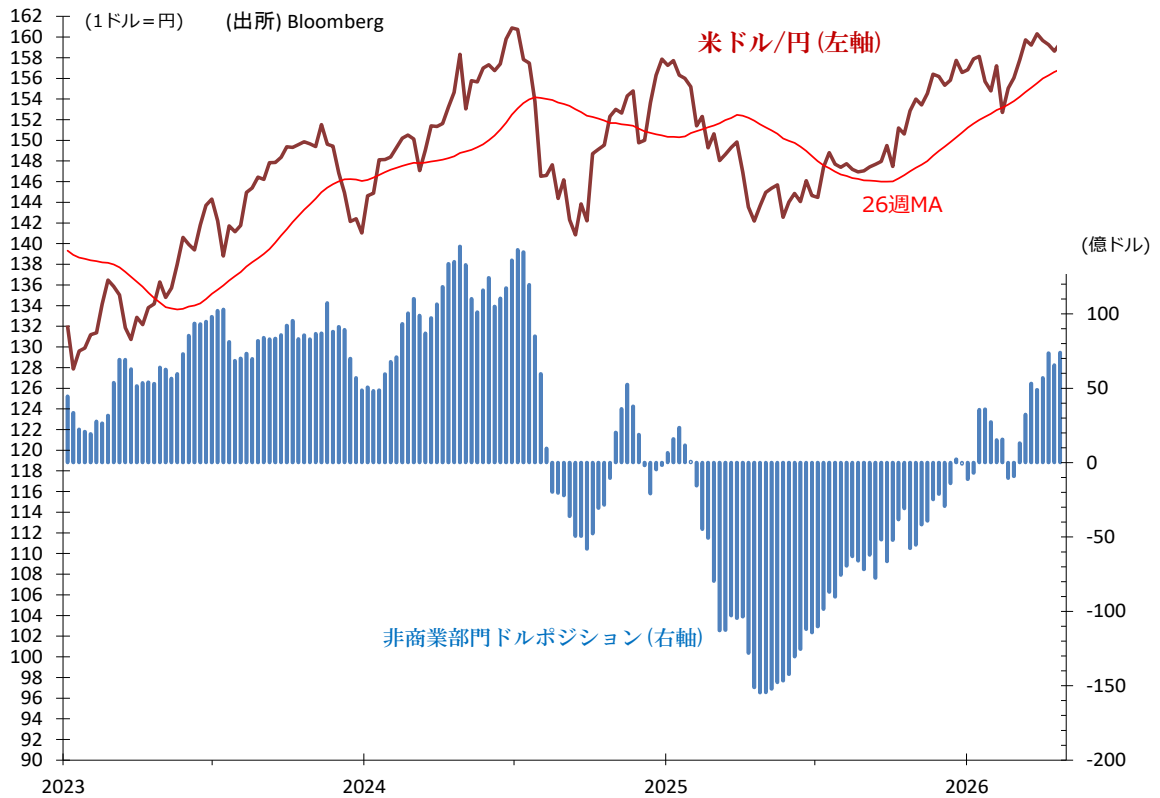
152 円処への円高が示現すると、週足分析のように、1ドル=140 円への円高シナリオはより現実味を帯びるでしょう。

金利差からのドル/円推計値

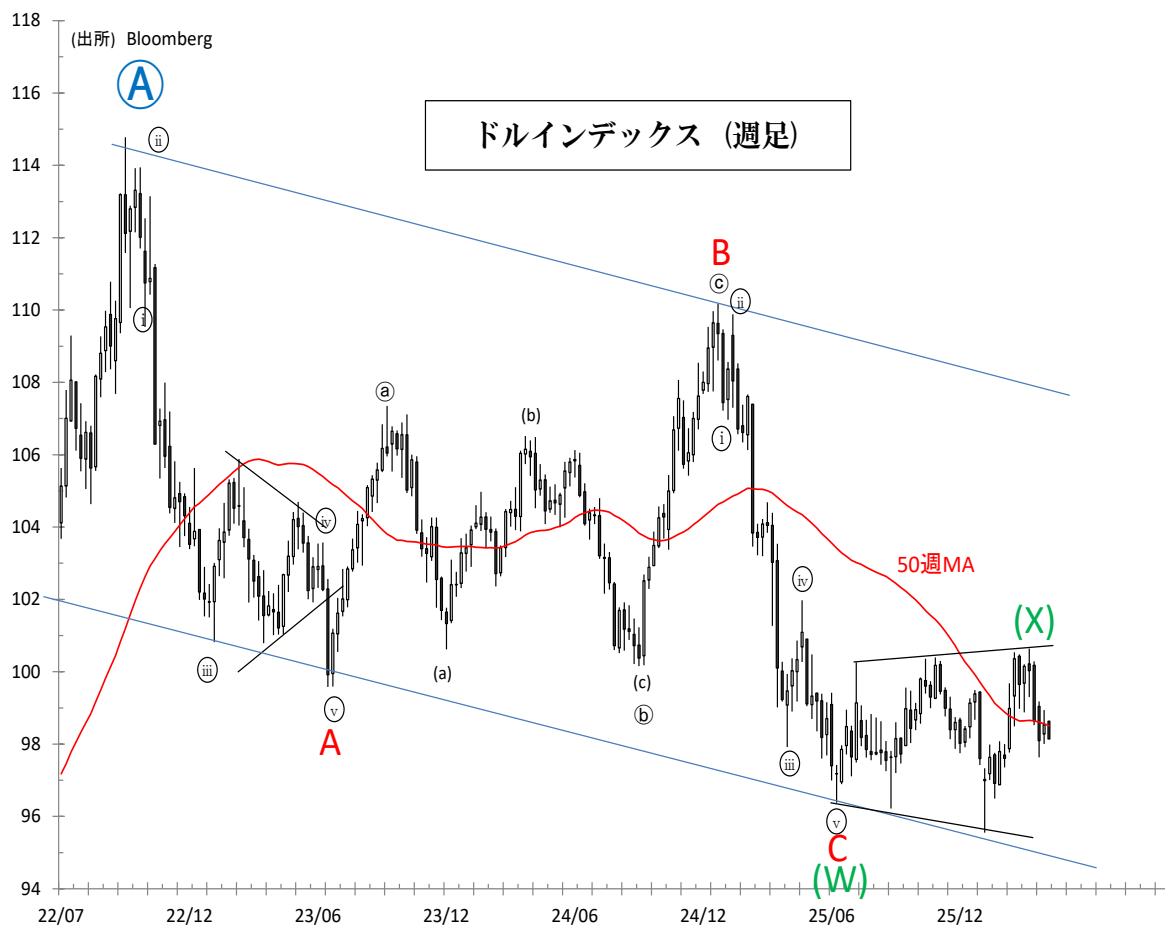
足元、日米実質金利差からのドル/円推計値は[137.484 円]です。

投機筋の円売り持ち高が拡大 (2026年4月21日時点)

IMM 通貨先物市場において、投機筋(非商業部門)の円売り持ちは、前週の 65.5 億ドルから 74.08 億ドルへ 2 週ぶりに拡大しました。



ドルインデックス (ドル指数)

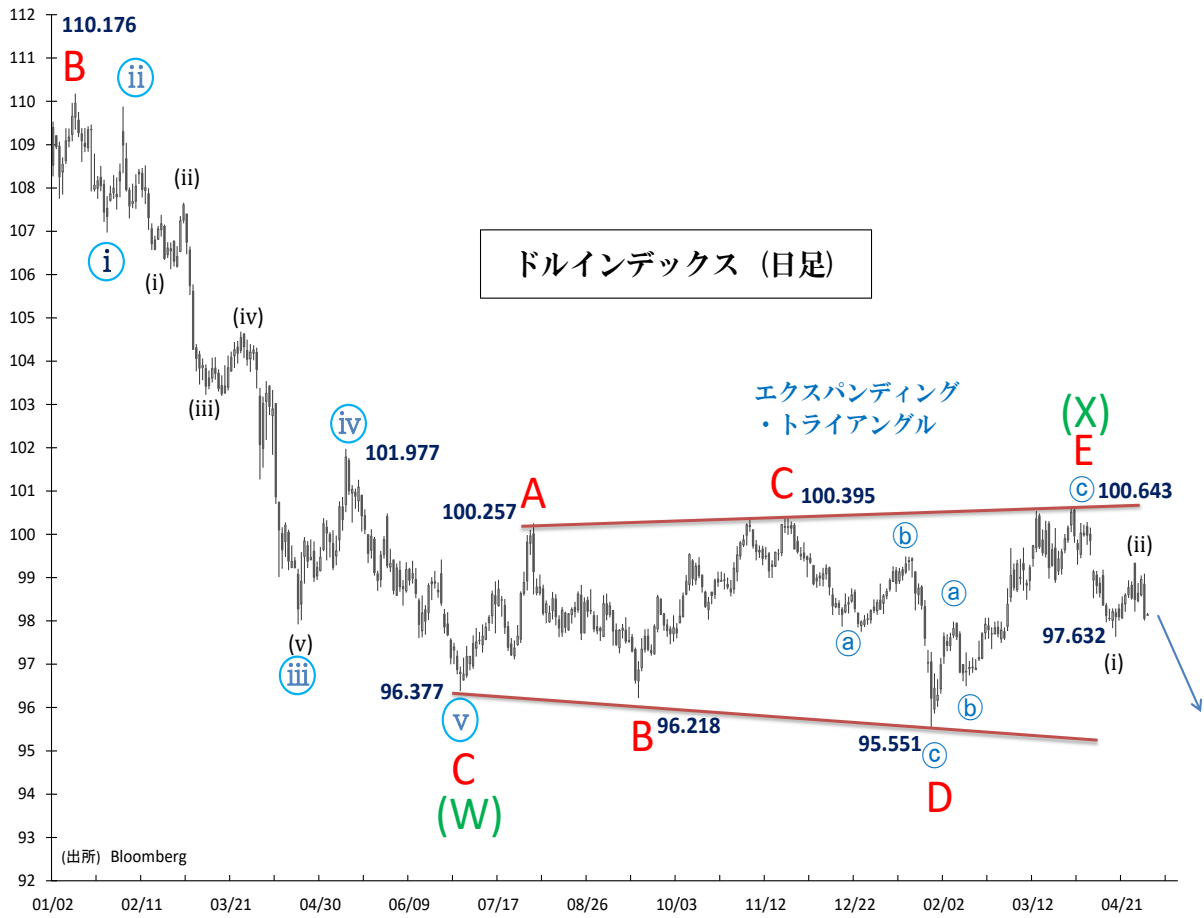


【エリオット波動分析】

25年7月(96.377)からの(X)波は、時間が経つごとに高値と安値が広がる(三角)保ち合い相場=「エクспанディング(拡大)・トライアングル」(A-B-C-D-E)の可能性が高い、とみています。

1月から4月のドル高に対し61.8%押し水準は[97.496]ですが、4月17日に97.632まで一時下げた後は反発しています。このリバウンドは第(ii)波に位置付けられます。

今後97.632を下方ブレイクすると、第(iii)波によるドル安トレンド入りの可能性が高まります。第(iii)波によりドル指数は、年内にも95.551を明確に下回る可能性があります。



※当レポートは、情報提供を目的としたものであり、特定の商品の推奨あるいは特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。

※当レポートに記載する相場見通しや売買戦略は、ファンダメンタル分析やテクニカル分析などを用いた執筆者個人の判断に基づくものであり、予告なく変更になる場合があります。また、相場の行方を保証するものではありません。お取引はご自身で判断いただきますようお願いいたします。

※当レポートのデータ情報等は信頼できると思われる各種情報源から入手したものです。当社はその正確性・安全性等を保証するものではありません。

※相場の状況により、当社のレートとレポート内のレートが異なる場合があります。

当社サービスに関する注意事項

・取引開始にあたっては契約締結前書面をよくお読みになり、リスク・取引等の内容をご理解いただいた上で、ご自身の判断にてお願いいたします。

・当社の店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引は、元本および収益が保証されているものではありません。また、取引総代金に比較して少額の資金で取引を行うため、取引の対象となる金融商品の価格変動により、多額の利益となることもありますが、お客様が差し入れた証拠金を上回る損失が生じるおそれもあります。また、各金融市場の閉鎖等、不可抗力と認められる事由により店頭外国為替証拠金取引および店頭 CFD 取引が不能となるおそれがあります。

・店頭外国為替証拠金取引、店頭 CFD 取引における取引手数料は無料です。

・当社が提示するレートには、買値と売値に差(スプレッド)があります。流動性が低くなる場合や、天変地異または戦争等による相場の急激な変動が生じた場合、スプレッドが広がる場合があります。

・店頭外国為替証拠金取引に必要な証拠金額は、個人のお客様の場合、取引総代金の 4%以上です。法人のお客様の場合、取引総代金に、金融先物取引業協会が算出した通貨ペアごとの証拠金率(為替リスク想定比率)を基に当社が算出した証拠金率を乗じた金額となります。為替リスク想定比率は、金融商品取引業等に関する内閣府令第 117 条第 27 項第 1 号に規定される定量的計算モデルを用い算出します。なお、証拠金率(為替リスク想定比率)は変動いたします。店頭 CFD 取引に必要な証拠金額は、取引総代金の 10%です。

金融商品取引業 関東財務局長(金商)第 2797 号

【加入協会】日本証券業協会 一般社団法人 金融先物取引業協会
株式会社マネースクエア
